



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教材研究 授業報告 : 留学生の現代日本文学入門
Author(s)	西, 昌樹; Nishi, Masaki
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 62, 51-58
Issue Date	2012-05-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49293
Type	departmental bulletin paper
File Information	MSC62_004.pdf



教材研究 授業報告：留学生の現代日本文学入門

西 昌 樹

I はじめに

筆者は2009、2010年度に留学生向けの日本語・日本文化研修コースにおいて、日本の文学・芸術を担当した。中級程度の日本語ができる留学生に日本語で日本の現代文学（第2次大戦後から現代まで）を教えたのである。最初の2009年度においては、すでに海外の大学において日本文学を学んだ経験のある留学生に対して、漱石に代表される日本文学の授業と異なった視点を提示し、日本文学の膨大な広がりを紹介しようと試みた。言わば彼らにとっての文豪中心ではない日本文学の裏文学史の提示である。

II 初年度の試みと反省

以下にあげるのはその授業報告、その授業内容と採り上げた作家である。ここで問題としたのは、作家の文章力とジャンル（純文学、エンタテインメントなど）の横断である。純文学を優先せず、大衆小説を含み時系列のバランスを顧みず、面白いもの、優れた作品を重視している。もとより15回の授業で明治以後の文学を概説することは筆者には不可能と思われたので最初から偏ったものになることは覚悟の上である。

まず参考までに最初の授業企画を上げる。日本の芸術・文学の総合的理解のため、映像作品、美術、歌も入っている。

- 1) 序論：純文学からエンタテインメントへ 鏡花、谷崎、吉行
- 2) 江戸川乱歩——都市を具現するタイムノベル
- 3) 堀辰雄、中島敦、牧野信一：西洋的なもの・日本的なものとの前衛性
- 4) 迷路と地獄：夢野久作、小栗虫太郎、久生十蘭
- 5) 戦後、廃墟と解放：坂口安吾、武田泰淳
- 6) 人工性の極致：三島由紀夫
- 7) 反抗とアモラル、ヴァイオレンス：石原慎太郎、村上龍、花村萬月
- 8) プログラムピクチャ：鈴木清順、田中登

- 9) 文化的記憶：小林信彦
- 10) 正統的：橋本治
- 11) ゲームと言葉：西尾維新、米澤穂信
- 12) 荒木経惟（写真）
- 13) 歌と詩（うた）：荒井由美、中島みゆき、井上陽水
- 14) 会田誠（美術）
- 15) 水村美苗『日本語が亡びるとき』：戦後日本とは何だったか

注) 最初の企画案以前の、一番初期には別の案もあった。相違点だけ引用する。

12) 写真家の姿勢：荒木経惟 vs 篠山紀信

実際の授業においては、最初の案と少々異なった。古典としては、その文章家としての評価から露伴、鏡花を選んだ。しかし留学生は殆ど読めなかったのは反省点である（『五重塔』『高野聖』、注『眉かくしの霊』を最初に選んで検討したが、引用箇所を選択が難しく思われて引用できず）。その後は主に戦後作家から選んだ。作品の選択は筆者独自の評価による。

採り上げた（採り上げる予定だったものもわずか含む）主な文学作品を順不同で記すと堀辰雄『聖家族』『風立ちぬ』、中島敦『山月記』『李陵』、牧野信一『吊籠と月光と』『ゼーロン』、江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』『人間椅子』『押絵と旅する男』（都市論としても乱歩は読める、参考：松山巖『乱歩と東京』）、夢野久作『死後の恋』『ドグラマグラ』、久生十蘭『湖畔』、小栗虫太郎『二十世紀鐵仮面』、三島由紀夫『鍵のかかる部屋』『春子』『春の雪』、武田泰淳『もの食う女』、吉行淳之介『鳥獣虫魚』、谷崎潤一郎『痴人の愛』『瘋癲老人日記』、坂口安吾『墮落論』『外套と青空』『青鬼の禪を洗う女』、太宰治『駆け込み訴え』『桜桃』、石原慎太郎『処刑の部屋』『完全な遊戯』、片岡義男『ラジオが泣いた夜』、村上龍『イン・ザ・ミソスープ』、花村萬月『笑う山崎』、橋本治『桃尻娘』、小林信彦『うらなり』（漱石『坊ちゃん』との比較）『唐獅子株式会社』、宮本輝『泥の河』『青が散る』、歌詞：井上陽水、中島みゆき、荒井由美、水村美苗『日本語が亡びるとき』などである。

この授業の試みは反省点が多かった。留学生の日本語能力の読み違えである。何が書いてあるのかは十分理解したのだが（露伴、鏡花を除く）、文章を楽しみ、文章のうまさを理解し、鑑賞し評価する余裕に乏しかった。テキスト選定の難しさを痛感した次第である。

III 2010年度 of テキストの選定方針と実施プログラム

前年の反省を基にして留学生が簡単に読め、しかも彼らが授業以外で楽しんで読んでいる小

説をテキストにすることを考えた。彼らへのアンケートを集計したが、良く読まれているのは、圧倒的にライトノベルであった。そこで文体の変遷を、口語体を強調する小説からライトノベルに至る過程で考察することを目的にして、戦後の小説の文体上の話し言葉、口語体文章の変化を論じることにした。同時にライトノベルというジャンルの総合的展望を論じ、併せてその概略史を講じることで、単なる娯楽や趣味的なものでなく、新しいジャンルとして見ることに、履修者の興味を惹起することを図った。

選定の際、重視したのは日本語の文体の可能性を広げた作品、新しい文体の創造や他の作者に影響を与えた作品である。ここでは文学的に秀れていることは絶対的な要素ではなく、あくまでも副次的であり、人気があり面白いものであり、かつ注目すべき作品であることを考慮した。とりわけライトノベルでは、膨大な作品（現在も毎月数多くの作品が出版され、またデビューする多くの新人作家も1～3作で消える場合も多い）の中で特に有名な作品であること、またライトノベル史を考えると重要な位置を占めると考えられる作品を選択することを、併せて考慮した。

以下がそのプログラムである（1）から15）は第1週から第15週に対応）。

1) はじめに：文章スタイル（文体）の変化と多様性を考える

吉本ばなな『キッチン』、村上龍『ラブ&ポップ』、松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』、椎名誠『さらば国分寺書店のオババ』『もだえ苦しむ活字中毒者地獄の味噌蔵』、片岡義男『ボビーに首ったけ』『美人物語』、森絵都『永遠の出口』

2) 語りと小説の文体、物語りから口語体へ：新井素子『あたしの中の...』『ひとめあなたに』『絶句』『わにわに物語』

3) 新しい口語体（1）：氷室冴子『クララ白書』『ざ・ちえんじ』『なんて素敵にジャパネスク』『海がきこえる』『冴子の東京物語』

4) 新しい口語体（2）少女の語り（男性による女性文体）：太宰治『女生徒』『斜陽』、高千穂遙『グーティペアの大冒険』、橋本治『桃尻娘』『桃尻語訳枕草子』（比較のため、いくつかの枕草子現代語訳、学者によるものと作家『杉本苑子の枕草子』）（橋本治の参考『恋の花詞集』）

5) ライトノベルの文体：水野良『ロードス島戦記』、神坂一『スレイヤーズ!』、谷川流『涼宮ハルヒの憂鬱』、（椎名高志のコミック『絶対可憐チルドレン14』、ハルヒねたのギャグ）、上遠野浩平『ブギーポップは笑わない』、おかゆまさき『撲殺天使ドクロちゃん』、豪屋大介『A君（17）の戦争』

6) メガヒットの語り：片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』、Yoshi『Deep Love』（ケータイ小説）、（舞城王太郎『阿修羅ガール』を比較例に）

- 7) ライトノベルから一般小説へ(1) 桜庭一樹『GOSICK』『AD2015』『赤×ピンク』『推定少女』『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』『少女には向かない職業』『赤朽葉家の伝説』
- 8) ライトノベルから一般小説へ(2) 有川浩『塩の街』『図書館戦争』『植物図鑑』
- 9) ライトノベルから一般小説へ(3) 米澤穂信『氷菓』『春期限定いちごタルト事件』『さよなら妖精』『インシテミル』
- 10) キャラクター小説：田中芳樹『銀河英雄伝説』『薬師寺涼子の怪奇事件簿』（垣野内成美のコミック版も）、茅田砂胡『デルフィニア戦記』
- 11) ファンタジー、世界観の構築：小野不由美『十二国記』（『月の影 影の海』『凶南の翼』『黄昏の岸 暁の天』）、上橋菜穂子『精霊の守り人』『獣の奏者』
- 12) 言葉とストーリーのゲーム：西尾維新『クビシメロマンチスト』『クビツリハイスクール』『零崎軌識の人間ノック』『新本格魔法少女リスカ』『化物語』
- 13) 今日の少女の語り：山田詠美『放課後の音符』（少年の語りで『ぼくは勉強ができない』）、誉田哲也『疾風ガール』、嶽本野ばら『下妻物語』 豊島ミホ『檸檬のころ』
- 14) おたたく的：三浦しおん『格闘する者に○』『まほろ駅前多田便利軒』『まほろ駅前番外地』『乙女なげやり』
- 15) 今日の文体：綿矢りさ『勝手にふるえてろ』、川上未映子『乳と卵』

まず1)で現代小説のさまざまな文体の例を提示する。まさに文学的な文章から、昭和軽薄体と言われたものまでである。片岡義男は登場人物の名さえつけない（彼、彼女だけ）作品があり、また淡々とした語り口で感情描写を排した文体は、日本の小説でハードボイルドと言える例の一つであるからである（小林信彦の指摘による）。しかしここではまだ多くは文体の自由な破壊（口語化を含め）に至っていない。2)と3)で口語体の先駆者を探り上げた（新井素子のあとがきの書き出し、「えっと、あとがきです」は有名になった）。氷室冴子は小林信彦をして、口語体の秀れた作家と評価された。4)は男性による少女の文体の始まりである。古くは太宰の女言葉、女の子の乱暴な話し言葉の創始者（記録者）である高千穂遥、桃尻語と言われた橋本治（橋本は特に留学生にとっても面白いと評判になり、レポートも出た）である。5)はライトノベルの概略史を解説しつつ、特徴的な文体を紹介した。いずれも有名な作品である。一般小説に近い文体から、会話をつないでいくもの、極端な話し言葉までの例を示した。6)は近年のベストセラーの傾向理解のための作品を選んだ。特にケータイ小説はその特徴的な語りと行替えが目される。7)から9)は、ライトノベルから一般の小説へ移行した作家を扱った。桜庭一樹はその作品のエンタテインメントと純文学の分類は無用であるし、ジャンルを横断した小説を書いている。有川浩はエンタテインメント作家であるが、SF、ミリタリー色のあふれる小説から一般小説まで書く。米澤穂信はミステリー作家であり、日常の謎を扱ったものが多い。この他にも今日の一般小説はライトノベルや児童文学の出自をもつ者が多い（あさのあつ

こ、森絵都、上橋菜穂子は児童文学から)。またオタクの出自とオタク的感性も注目される(三浦しおん)。これらの作家の文章は一般小説と変わりはない。10) から12) には、順にキャラクター小説の例、ファンタジーのジャンル作品、言葉遊びの作品を選んだ。いずれも人気作家である。キャラクターの魅力が読者に受け入れられると、ベストセラーが生まれやすい。ファンタジーもストーリーや世界観によって、読者を掴む。言葉の実験として興味深いのは12) の西尾維新であろう。ベストセラー作家であるが、ユニークな登場人物(存在感は薄い)と、非現実的なストーリーの作品で、注目すべきはその話し言葉で、戯言、ギャグ、つつこみや罵詈雑言、『リスカ』におけるヒロインの話し言葉の語順の混乱など非常に興味深い。13) は今日の少女の語りの文体の例である。正統的な山田詠美と豊島ミホの他は男性作家であるが、嶽本野ばらという例を紹介することを企図した。4) と比べるとその変化が分かるであろう(乱暴な言葉使いの例は舞城王太郎『阿修羅ガール』)。14) はオタク的感性を基にした作家三浦しおんを採り上げた。オタクの社会化とも思えるが、この作者のオタク精神はエッセイ『シュミじゃないんだ』に詳しい。15) は今の文学のもっとも秀れた成果の例であり、両者の文体は考察に値すると思われる。

IV 将来の展望

上記の授業プログラムはまだ修正が必要である。ただ筆者の考えとしては、文学的評価の定まったもの(ただし戦後文学ではまだまだ古いとは言えぬが)や秀れた文学作品(たとえば大江健三郎や中上健次の)より、留学生に彼らが容易く読め、現在の日本文化を理解するのに役立つ、新しい文学(と言える価値がないなら、小説)を紹介し、その見取り図を描くことが目的の一つであった。そのため、採り上げる作品の選定にはまだまだ考慮の余地がある。

たとえばライトノベルに関しては、上記以外に注目すべき作家は多い。日日日(あきら)『さきみさん@がんばらない』、入間人間『電波女と青春男』(伏見つかさ『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』、平坂読『僕は友達が少ない』はもっと一般受けするヴァージョン)、深見真『アフリカン・ゲーム・カートリッジ』『ヤングガン・カルナバル』『ジーンズ』、小野不由美『ゴーストハント』などが直ちに挙げられる。

一般小説の最後に挙げた綿矢りさと川上未映子に付け加えるとすれば、高橋源一郎『恋する原発』(2011、講談社)であろう(勿論比較の意味で彼の『ペンギン村に陽は落ちて』も採り上げる必要がある)。すなわち文学的評価より文体の(文章スタイルの)好例であるかどうかという観点が必要になると筆者は考える。

また留学生教育で日本の文学を採り上げる時、あくまでも正統の文学史にのっとった文学を教えるか、それとも現代日本文化で若者に人気のある、しかも日本語で読む外国の若者にも人気の小説を採り上げるかという選択が問題になる。正統な文学史と言えば、漱石、一葉、谷崎、

川端、芥川、啄木、宇野、太宰、戦後は野間から三島、大江などに至る著作を解説すべきであろう。筆者の最初の試みは選択がいささか偏っていたにせよ、上記の2009年のプログラムに島尾、埴谷、花田清輝、吉田健一、竹内好あたりを加えたかったものである。しかし留学生にとって、吉田健一の随筆で、金沢の旅館で朝から酒を飲みつつ川の流れるという陶然とした境地を読んでも、何が良いのかいささかも理解できないと思える(日本人の若者でも同様である)。知識を教え込むのではなく、今日の日本文化の一側面として、ライトノベルとその先駆的作品を採り上げることには、意味があったと筆者は考える。それは現代の文芸の一部を占め、決して今の文学の秀れた成果である綿矢りさや川上未映子とも無関係ではないと思える。例えば舞城王太郎の作品(彼の絵やマンガを含む)を想起すれば、そのことはより理解しやすいであろう。

ここでは改良した授業プログラムを提示する余地はないが、短期間のこの試みの記録が、このような授業に関心を抱かれる方に、何らかの参考になれば幸いである。

(2011年11月4日受理)

《SUMMARY》

Program for Studies of Japanese Modern Literature

Masaki NISHI

To provide an insight into Japanese culture through Japanese modern novels, I give a class “Japanese modern literature” for international students. In this class, students read a variety of Japanese novels and then examine various aspects and styles of Japanese literature as presented in these novels. I give here the last version of this program, using novels based on the weekly themes listed below.

Course Description

- Week 1 General Introduction: Change of Style
Banana Yoshimoto, Ryu Murakami, Rieko Matsuura, Makoto Shiina, Yoshio Kataoka, Eto Mori
- Week 2 Origin of New Style: Motoko Arai
- Week 3 New Colloquial Expression 1: Saeko Himuro
- Week 4 New Colloquial Expression 2 (Girl’s monologue by a male author):
Osamu Dazai, Haruka Takachiho, Osamu Hashimoto
- Week 5 Light Novel, Historical Review: Ryo Mizuno (Record of Lodoss War), Hajime Kanzaka (Slayers), Nagaru Tanigawa (Haruhi Suzumiya), Kouhei Kadono (Boogiepop), Masaki Okayu (Dokuro-chan), Daisuke Goya (A-kun(17))
- Week 6 Great Hit: Kyoichi Katayama, Yoshi (Deep Love)
- Week 7 From Light Novel 1: Kazuki Sakuraba
- Week 8 From Light Novel 2: Hiro Arikawa
- Week 9 From Light Novel 3: Honobu Yonezawa
- Week 10 Character Novel: Yoshiki Tanaka, Sunako Kayata
- Week 11 Fantasy: Fuyumi Ono (Twelve Kingdoms), Nahoko Uehashi
- Week 12 Playing with Words: Ishin Nishio
- Week 13 Girl’s Monologue today: Eimi Yamada, Tetsuya Honda, Nobara Takemoto,
Miho Toyoshima

Week 14 Otaku: Shion Miura

Week 15 Today's Best: Risa Wataya and Mieko Kawakami